
リリカルなのは【最弱最強の護り手】

赤鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは【最弱最強の護り手】

【NZコード】

N5095Y

【作者名】

赤鷹

【あらすじ】

数有る転生者の中で最弱にして最強の主人公【伊附海斗】。彼は魔力も無ければ特別な能力も無い最弱な人間だが一つだけ最弱を簡単に最強にしてしまうチート能力を所有していた！

「つてこんな感じで言つたけど大丈夫か？」
「あゝ大丈夫大丈夫、どうせ誰も見やしないし」
「いきなり自虐ツスカ…作者」
「別に俺の作品なんて…」

「……（こんなので大丈夫か…？）」

といあえず転生者って事で（前書き）

なのは物は初めてとなる作者です。

この小説での主人公はシリアルでもボケ、ギャグでもボケます。

それではどうぞ！

とりあえず転生者って事で

【ミッドチルダの爽やかな朝】

「ふあー、今日も暇で平和『死ねオラア！ ブンッ！ ブンッ！ なつ！ うわあつ？！』だなー、そーいや今日隊長が呼んでた『コンチクシヨー！ バンッ！ バンッ なつ？！ 跳ね返ギャツ？！』様な気がする… つてさつきから何よアンタら？」

す

「テツテメエ！ 何だその能力は？！」

「能力？ あー『コイツか。悪いな、平常時は吸収と変換に設定してんだわ。だから君達の今の攻撃は無駄。てか俺なんかを相手にするだけもつと無駄。以上、じやね？』

俺はそう言つて薄暗く狭い路地を抜け、大通りに出る。

うんー、今日も多分良い天気だ！

あつ、今更ながら俺の名は伊附海斗。魔導師じゃないのに時空管理局に入局している『数ある転生者』の一人にして『最弱最強』の『転生者』だ。

最弱最強の意味は…

最弱ってのは俺にはまず『リンク』『コア』が存在しないから魔力は無く、『その他の不可思議なエネルギー』を全て持つてないし扱いきれない。だから俺は他の転生者より全てにおいて劣つて居る。まあ俺のレアスキルがあればそれすら全て超えるがな。

じゃあ何で最弱な癖に最強って言えんだって話しながら…さつきも述べた様に俺にはある一つだけチートを超えたチート能力がある。それは『どんな攻撃を受けても何食わぬ顔で無傷で受けた攻撃をそのまま返す』能力だ。

つまり俺に向かつて核ミサイルが放たれるとする。（順を追つて説明しよう）

核ミサイルが俺に向かつて発射

俺に着弾！俺ピーンチ！

と思ったら俺の体内に吸収され、そのまま俺の体内から核ミサイルが発射された場所に向かって発射

発射した場所が核に包まれた。

……となる。これは凡ゆる事にも対処可能らしく、この前『めだかボックス』の『大嘘つき』で俺の存在を消そうとした奴が俺の能力で逆に消えちまつたし（ミイラ取りがミイラになるとはこの事？）、同じく『めだかボックス』の『完全』で俺の能力をパクろうとした奴がパクることが出来ないって言つて尻尾巻いて逃げた事を覚えてる。

他には俺に止まる様に指図して来た栗色髪に白い服を着た女性が俺何もして無いのに『スター・ライト……ブレイカーアアアア――――――？？？？』とか良い歳こいてそんな厨一な必殺ビームを放つて来たけどその必殺ビームをそつくりそのまま送り返してやつた時の顔は見

ものだつたな。

なお、この能力に隙が無い？！とか弱点あんだけ？！と教える
よこのクズが！？とか思つたり考えたりしている頭が残念の君達に
朗報だ。勿論、この能力に弱点は有る。

それは…

『攻撃されなきや ただの突つ立つてゐる一般市民』 つて事だ。

……え？ 何処が弱点だとか思つてる頭が悪くて高校浪人生の君達。これがどういう意味か分からぬのかい？

つまりこの能力は自分から仕掛けたら発動しないのだよ？俺が何もしなけりやこつちは何も出来ないんだからな。……まあオートで反撃はするけど。

まあ兎に角！この能力は最弱の攻撃能力にして最強の防御能力つて
訳だ。因みに俺は攻撃を喰らつても痛くも痒くも無い。

……自分でも言つが「レなんてムカつくチート?

他の転生者とかはHBWとかガンダムとかウルトラマンとか仮面ライダーとかネギま！とか東方とかテイルズとか居んのになんて俺だけ対して目立ちそうも通常生活に支障も役立ちそうも無い地味イヽつな能力なんだ？需要あんのかこの能力？

今日はよく転生者達が来るねえ～。暇なのか？一ート？フリーター？親の金食い虫？まあ良いか。どうでも良いし」「

てかさつきの転生者。こんな街中の大通りでそんな大技使うなよ。まあ消えたけど。

これで今日だけで15人目だよ？本当に暇か一ートなの？一ートなら管理局に入れば楽なのに。そして俺の部署に入つて先輩面している俺に目一杯コキ使われる。そうすればどれだけ仕事が楽になる事やら…。

ウチの部署は非魔導戦闘員で固められた通常人為事件捜査五課。つまり「包丁で人殺しました」とか「実弾兵器（拳銃とか）で銀行強盗しどるで～」って奴を逮捕・現場検証・取り調べとかする部署だ。

別名：墮落署。

全員が質量兵器所有の許可を貰つており、質量兵器を使って敵を制圧するこういつた世界には珍しく、俺の出身惑星『地球』ではよくあるやり方だ。

ゲイズ親爺のお陰で質量兵器の所有が緩和になつた為、勢いでロケランとかガトリングとかナパームとかマシンガンとか地雷とかミサイルや焼夷弾や…以下etc。

を所有する権利・権限を修得しているのは管理局で俺1人だけだ。まあ当然だが。暇だつたし。

さて、こつやつて説明しているウチに自分に割り振り配属された自分の部署に着いた。俺はカードキーを通して中に入り、自分の机の上にバックを置いて、そのまま隊長室に入る。勿論、入り方は…

「 ドガソッ！ オラアアア――――？ ヤキ入れたんぞ、ゴラアア
アア――――――？？」

「 ヤクザかテメエは？！ もつと普通に入れやボケカス！？」

俺は押しドアを蹴り飛ばして中に入りヤクザな振る舞いをか持ち出しながら侵入する。

中には特に説明する価値も無い面をした隊長と茶髪に短髪の狸顔した女性が居た。うんまあこいつこいつは…

「 其処のアンタ、ワイの名は伊附海斗じやけんのあー、ヨロシク
頼むけえー 」

俺は左手を女性に差し出す。

「 や、ハ神はなてです。こ、此方こそこよろじゅう…」

女性も左手を差し出して手を握つて握手をする。

… フン、左手の握手の意味も知らんとは…。

「 オイテメヒ、何時迄そのネタやるつもりだ？」「アアー！ ？ とつと
と普通にじるー。」

「 「普通にじるー。」 それが彼の最期の言葉であった…

「 死ぬんか俺は？！」

「まあ良いじゃねえか！どうせアンタの事なんて任天堂のバーチャルボーライカ桃太郎の包丁並みのどうでもよくて忘れられ易い存在なんだから」

「テメー！それが上司にいつ台詞か？！」

「上司だったの！？」

「そこからか！？ってかネタ中断！やめい！話しが進まんだろうが！？」

「え～…まだネタ有ったのにい～」

「ハイハイ、後で巨乳シリーズのAV買つたるから黙りつか

「Yes Boss。今回の私に『えられた』ミッションは何でしょ
うか？」

「その言い方止める。紹介は済んだから話しが続けるぞ」

「うーかー

「この度この八神はやて氏が機動六課を立ち上げることになり、お
前にも配属して欲しいんだ」

「へえ～…部署を立ち上げるんスね！その歳でスゲェな！」

「そんな事あらへんよ、試験期間が1年しかあらへん急造の部署や
し…でもウチの夢が漸く叶いそつなんや！」

「ふうん、アンタの夢応援してるよ。んじや「ちよいと待てやゴラ！テメエワザと最後の部分飛ばしてそのまま立ち去りうとしたなあ？」何の事やらせつぱり！俺の頭は4GBしか入らないから覚えて無いや

「4GBって容量少なつ？！てか普通に4GBでも覚えてられるわ！？」

「……チイ、そこまでバカじや無かつたか……やはり此処は証言隠滅の為に自宅に焼夷弾をぶち込んだ後にコイツを抹殺した方が……」

「恐ろしい事言つてんじゃねえええ――――――! ? 兎に角! 貴様には機動六課に移籍して貰うからな! 」

「お前は二ートに移籍しろ」

「お前をたずそ！？ オイコト！？」

ああ、あのまゝ……なんざお罪を重ひても……

「……ん？ああ悪かつたな、八神。此方は直接的な関与は出来んが出来る限り協力は惜しまない気だ。頼むぞ」

「はい！ヨロシクお願ひします！」

「おいそこ馬鹿面！八神はやて一佐の御帰りだ！お見送りして来い！」
「ゴコロシ！？」

「グボオツ？！」

上司の踏み付けが顔面に突き刺さる。

クウ～！何でコイツには俺の能力が通用しねえんだよ～！全く～、お陰で体内に保存していたドラゴンボールが3つ程排出しちまつたじゃねえか。（勿論ながらギャグです）

「ああ～痛てて…そんじやハ神一佐。此方になります…」

俺は上司を睨みながらハ神一佐をエスコートしながら出口へ案内する。

【道中】

俺の右には頭一個分小さいハ神はやて一佐が一緒に平行して歩く。

「わっさの上司との漫才おもろかつたで伊附一等陸士」

「え？ なあに言つてんスか？ あれば『上司』と書いて『家畜』と呼ぶ仲ッスよ？」

「……何やう…突つ込んだら危険な氣がパンパンするんやけど…」

「じゃあしない方が良いッスね。俺のギャグはアイツと藤子不一雄先生位しか受け流せないから」

「藤子不一雄先生受け流せるん…？」

「そうつすよ～、もうあの人とは長い付き合いにして…倒れそうになつた藤子不一雄先生に『リボリタンX』を飲ませたのも俺なんですから！」

「へ、へへ～～（ア、アカソ～～）」いつタイプのギャグには付いて
行けへん…！」

そう思いながらはやて一佐は部署を後にした事は本人以外誰も知らない。

さて、見送りも済んだし、転移手続きとか後継ぎとかしなきゃいけないから今日は色々と準備しないといけないから大変だな。

……取り上げず上向は後でゼロ距離スタンガンの刑だ。

あつ、因みにわっさから上向上向つて言つてゐるけどこの部署の隊長の苗字が上向なだけだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5095y/>

リリカルなのは【最弱最強の護り手】

2011年11月17日20時41分発行